切断と接続のあいだ

―後付けバルコニーから思考する開いた建築手法―

1 研究背景・目的

後付けバルコニーに興味がある。それは住宅に取り付き機能的に一体化していようとも常に異物として自律しているかのようである。同時にそれは一義的都市環境の中で自由な振る舞いを魅せ、静的な都市に動的関係性をもたらし解釈を促す。様々な解釈を許容する建築・都市へと向かう手掛りとして後付けバルコニーにその可能性を感じるのである。

本研究では後付けバルコニーというものを足がかりに、一義的な都市環境に対して、発見に溢れた日常へと変化させる建築手法の獲得を目的としている。ここでいう「発見」とは事物が環境との相互作用を通じて、既存の意味を破壊し新たな関係や意味を創発する、認識的な解釈の余地である。すなわち、一義的解釈に基づいた都市環境に対して、多様な解釈を要請し新たな関係へと動機づける「開いた建築手法」の獲得が本研究の主題となる。

2 後付けバルコニーという存在

街中でよく見かける他者の意図やシステムに従属しない「後付けバルコニー」という存在に着目し、フィールドワークを通して考察を行なった。後付けバルコニーという存在は、住宅に取り付き機能的に一体化していようとも常に異物として自由な振る舞いを魅せ、自律しているようであった。それは同時に道に溢れ出た植栽などとも近い関係に捉えられることや、様々な解釈の仕方にも寛容であった。

「後付けバルコニー」を建築に従属しない自律的存在として位置付ける

3 事物の認識

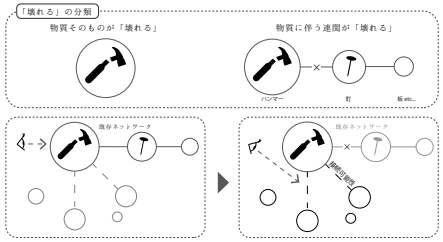
■ 事物の認識について

私たちは普段モノを、目的に向かったネットワークとして抽象的に捉えている。そのため、モノに対する理解は目的の中で規定された一側面に過ぎない。そして私たちは物が壊れた時にやっと、その物自体がどのような構造であるかのかと向き合いはじめる。

それを逆手に取るなら、壊れるに相当する装置を生み出すことが出来れば新たな関係を表出させ発見に溢れた日常へと向かうことができると考える。

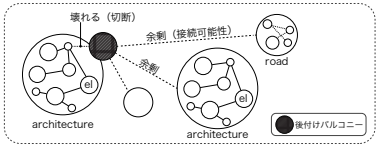
■「壊れる」について

ここで壊れるという現象を二つに分け整理する。一つは、物質そのものが壊れること。もう一つは、物質が壊れたことに伴う「人とモノ」、「モノとモノ」の間に結ばれていた事物の連関（ネットワーク）が壊れること。本研究では「壊れる」という現象を事物の連関が壊れることに注視し、これまで規定されていた事物のネットワークが切り離された状態と定義する。同時にそれはこれまで束縛されていた関係性を切断することによって、新たな可能性が開かれることを意味する。



4 後付けバルコニーの再定義

以上を踏まえた上で、後付けバルコニーの意義を再定義するなら、常に異物として存在する自律性は、建築とのネットワークから切り離されている。つまり、壊れていると解釈できる。すなわち、後付けバルコニーという異物は、建築とのネットワークから「切断」されていることによって、新たな異なる関係性へと「接続」する可能性が開かれていると再定義できる。そのような、後付けバルコニーから見出される性質を、本研究では「切断と接続のあいだ」と呼ぶこととする。



5 切断と接続のあいだ

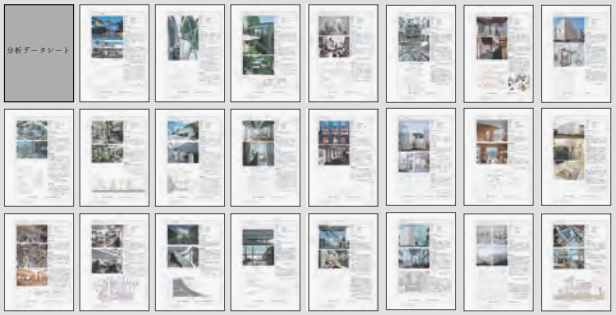
後付けバルコニーから見出された性質を他のオブジェクトに適応させる概念へとするため定義を行う。

「切断と接続のあいだ」の定義

建築の論理における限定的な関係性を切断することによって、周囲の環境との新たな接続関係を切り拓く自律的オブジェクト

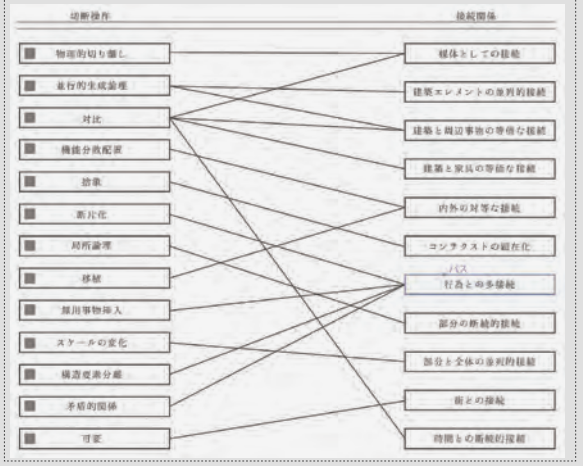
6 建築事例分析

「切断と接続のあいだ」の定義をもとに事例分析を行い、切断操作の抽出とそれに伴った多様な接続関係の確認を行う。



抽出された切断操作

切断と接続の関係表



フィールドワークを通じて撮影した「後付けバルコニー」のサンプル．

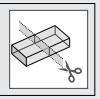
■ 抽出された 15 の切断操作

切断操作一覧

01 物理的切り離しによる切断

□抽出作品
・01: 始めの秘密
・02: 蛇生のランドマーク
・05: 西沢の場合

□概要
・慣習的に認知されている事物同士の物理的な取り合いを切断し、新たな領域の構成を可能にする切断操作。



02 並行的生成論理による切断

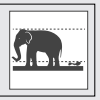
□抽出作品
・03: 桃山ハウス

□概要
・各部材の構築論理が被膜されず、並行した生成論理を持つことで、部材間の序列関係を切断する。あらゆる事物が並列的な関係を示す切断操作。

03 対比関係による切断

□抽出作品
・04: 横浜アパートメントハウス
・06: dada2010
・09: 西沢の場合
・24: 貝沢の家

□概要
・構成部材、転置/密度、建築/土木、新/旧、などを対比することによって、事物同士間の関係を切り離す切断操作。



04 機能分散配置による切断

□抽出作品
・05: 森山邸

□概要
・一般的に居建築内に集約される機能のネットワークを切断・分散し、他の建築あるいは内部空間・外部空間を等価な関係として接続させる切断操作。

05 抽象による切断

□抽出作品
・05: 森山邸
・16: 半島の家

□概要
・余計な情報を削ぎ落とすことで、複雑に絡み合う問題を切断し、特定の情報だけを接続させることを可能にする切断操作。

06 事物の断片化による切断

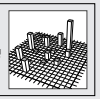
□抽出作品
・07: 藤棚のアパートメント
・17: 伊達の家

□概要
・組織化されている事物を断片化することによって、それぞれの構成要素を意味の漂白された事物の状態に戻元する切断操作。

07 局所的論理による切断

□抽出作品
・10: 門脇邸
・20: メタルラボのアネックス

□概要
・各部分の論理がそれぞれ、建築の外側の関係に表出し、局所的に機能を行う。建築の外側に対しては接続的であり、建築の内側に対しては切断的な全体性を生む切断操作。



08 移植による切断

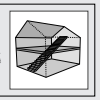
□抽出作品
・11: 新体の恋

□概要
・本来あるべき所に定位するはずの事物が、他の場へ移植されることで、不一致な関係が生じ、事物を日常的な存在へと遷移させる切断操作。

09 無用事物挿入による切断

□抽出作品
・12：天井の相円
・15：階段の家
・21：HOUSE OM

□概要
・明確な目的を持たない事物を挿入することによって、これまで固定されてきた事物の関係を切断し、新たな関係構築へと動機づける切断操作。



10 スケールの変化による切断

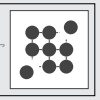
□抽出作品
・13：ライジマティクス新オフィス移転計画

□概要
・慣習的な捉われ方を持つ事物をスケールの変化によって、応ある慣習的なモノに対する認識のいを混ぜ合わせながらも、他の日常へと転用させることが可能な切断操作。

11 構造要素の分離による切断

□抽出作品
・14：笠木の住居
・19：古部屋
・18: 神奈川工科大学 KAIT 工房

□概要
・建物の構造的構成要素から分離することによって、構造要素でありながらも目標的な事物として見えることを可能にする切断操作。



12 矛盾的関係性による切断

□抽出作品
・22：2004

□概要
・空間認識される事物同士の間柔や意味が、ある矛盾的な関わり方をすることによって慣習的な意味を切断し、新たな意味を獲得させる切断操作。

13 可変性による切断

□抽出作品
・23：家と道

□概要
・可動性を有する事物が動くことによって、応答による他事物の捉え方を変化させることを可能にする切断操作。

14 大地との分離による切断

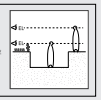
□抽出作品
・22：2004

□概要
・大地から建築を切り離すことによって、建築と大地の間に生まれる期間の解釈や建築と植生との関係構築をもたらす切断操作。

15 視点操作による切断

□抽出作品
・22：2004

□概要
・解ミ上という大地の操作によって、視点の変化をもたる。大地と近い距離であらゆる事物を並列的な目線で眺めさせる切断操作。



■ 事例分析の考察

以上２３事例を踏えた上で考察を行う。本事例分析では、15 個の切断操作が抽出され、それぞれの多様な接続関係をを確認した。例えば、「捨象による切断」は建築の具体として現れる不要なマテリアルによる記号性を捨象し、その街の特質のみとの接続関係を示すことを可能にし、「並行生成論理による切断」は各部材の構築論理が並行した生成論理を持つことで部材間の序列関係を切断し、建築のエレメントそれぞれが固有の事物へと還元される。それぞれの固有化された建築エレメントは、外構の事物と等価な関係として接続し、庭と一体化した空間の構築を可能にしていることが理解された。このように建築における何らかの諸要素を切断することは、新たな接続関係を築く余剰を生み出し、建築の開かれた繋がりを指向させるのである。

そして、23 の事例分析にみられた切断とそれによる接続関係を可能にする切断物を考察するのであれば、切断性を示す事物は、「A≒切断物≒B」といったＡとＢという異なる事物の間に存在することが言えるだろう。言い換えるなら、切断が認められた事物は新たな異なる接続性を示すだけでなく、ＡとＢ間をつなぎ合わせる「媒介者 C」として切断物を位置づけることができるのだ。

つまり、互いに干渉し合わない２つ以上の事物が挙げられるなかで、その中間として位置付けられる事物を対象とし、抽出された切断操作を用いることで、設計手法として確立することができると結論づけられる。

■ 設計概要

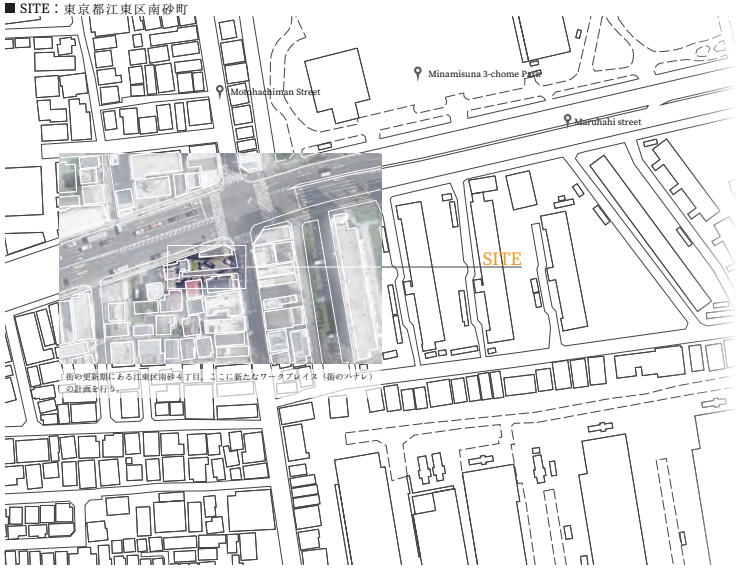
現代の街は機能的・制度的に計画され尽くされた。それに伴い我々現代人の暮らしは、限定的で受動的な日々を過ごしている。そのような一義的な都市環境に、人々が主体性を持って能動的に暮らし始めるきっかけを与えたい。

対象敷地は東京都江東区南砂町。この地は老朽化や空き家による建物の取り壊しが相次ぐ街の更新期にある。計画敷地はその老朽化等の取り壊しの波が押し寄せた一画であり、コロナウィルスによる「リモート化」や「地域コミュニティの活性化」など新たな生活様式が同時に求められた。

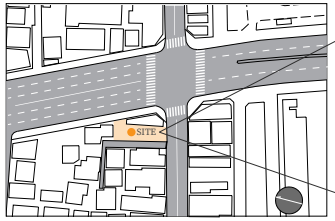
ここで計画したことは、コミュニティースペースといった既存生活の文脈とは無関係に場所をつくるというよりかは、近隣住民それぞれが共有する「ハナレ」といった具合に街へと既存の生活を拡張させる建築である。

それは、「人と人の関係」を結ぶ場のみならず、住民が街を再解釈しながら居場所や活動を読み込み続けられるといった、能動的暮らしを可能にする「人と街を結ぶ」建築である。

■ SITE：東京都江東区南砂町

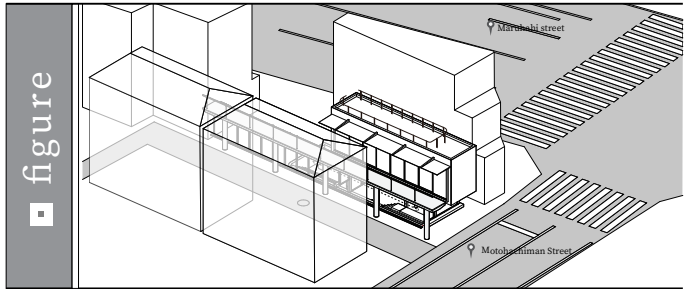


■ 敷地状況

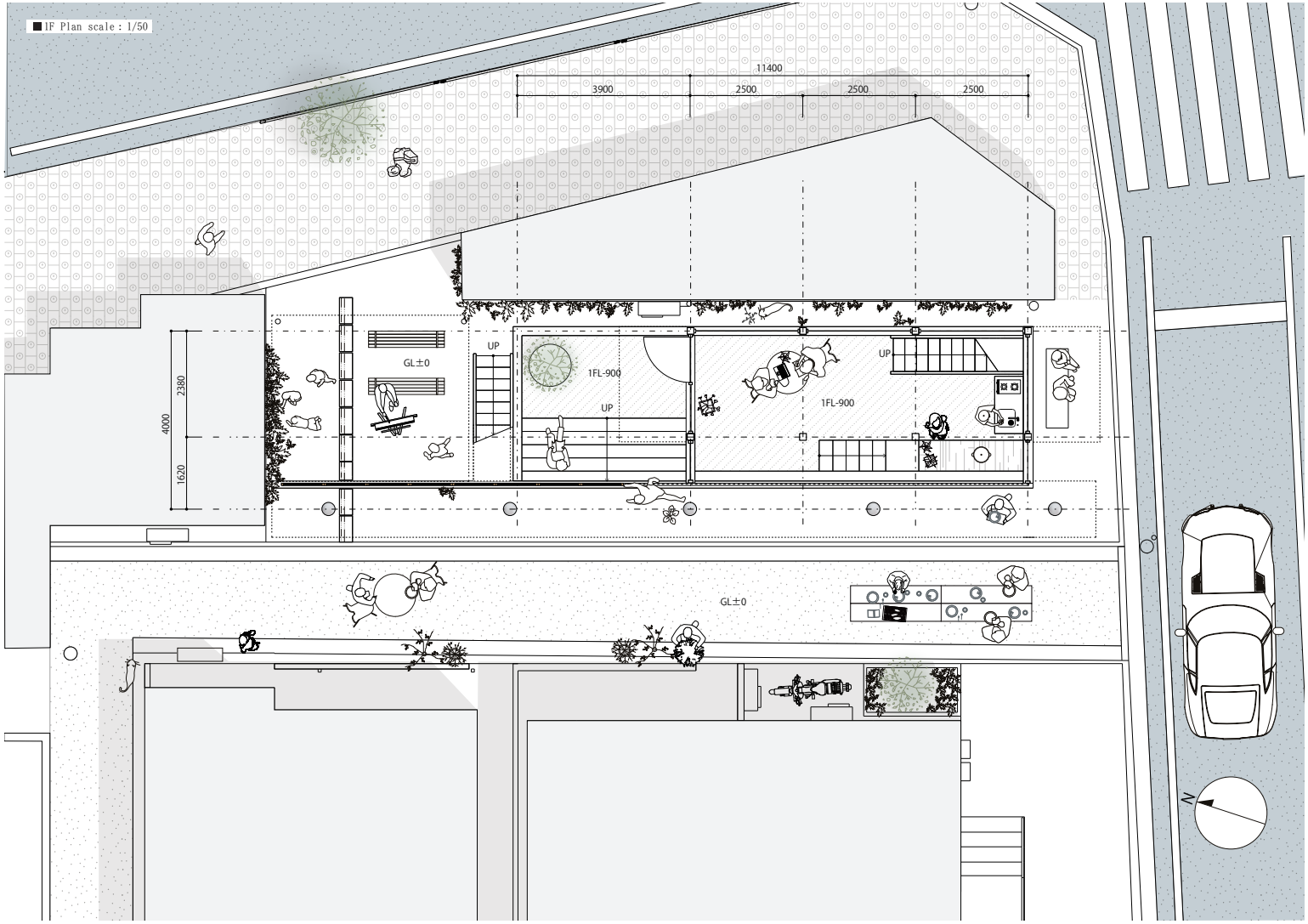


敷地は幅員・人通りが様々な３辺の道路に接し、隣家に囲まれる。建物の解体が進み更地となった敷地は、自家用車の置き場など住民の生活にとって有用な利用がなされず、仮としての場所の姿をみせる。

fig. 敷地の現状



■1F Plan scale : 1/50



白律化した窓は「建築の窓」としての役割を跳び越え、街の場を設える「街の窓」にも役割を変化させる。建築空間と都市空間を限りなく等価に扱う方法を考えた

白律化したバルコニーと建築ヴォリュームのレベル差によって、様々な使われ方を誘発する

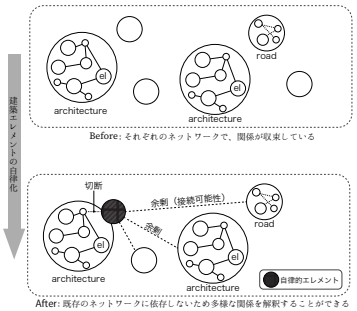
白律化した窓は大通りへと空間を方向付け、街に開かれたような場の質へとつくり変える

■ 生活を拡張させる「自律的な建築エレメント」

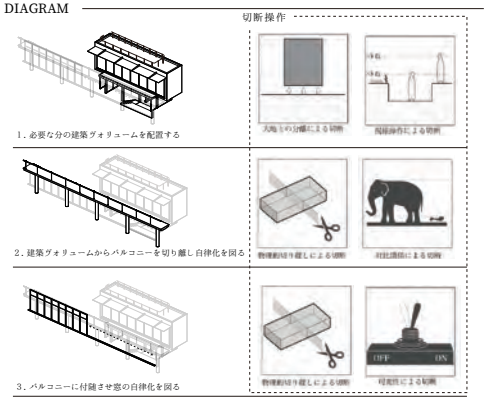
現代建築は様々な事物の取り合いや連関によって成立している。様々なエレメントは、一つの全体性へと向かった強度なネットワーク（連関）を構築し強固な秩序を形成している。しかし裏を返せば、それぞれのエレメントが持つ意味の根拠は、他のエレメントとの関係。つまり、他律的にその存在が規定され、一対一対応といったような限定的な関係性として意味が収束してしまっている。

ここで行なった操作は、その強度に意味や関係づけられた既存のネットワークから切り離された、「自律的な建築エレメント」の導入を図ったことである。それは、慣習的な意味合いを持った建築エレメントではなく、生活の中で意味を発見し更新し続けられる建築エレメントである。

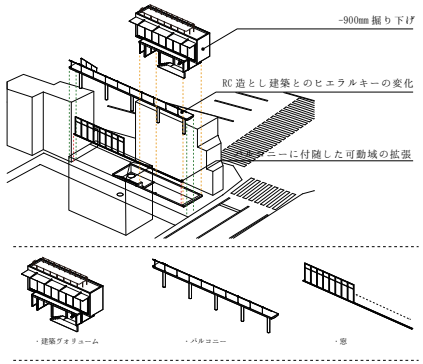
「自律的な建築エレメント」概念図



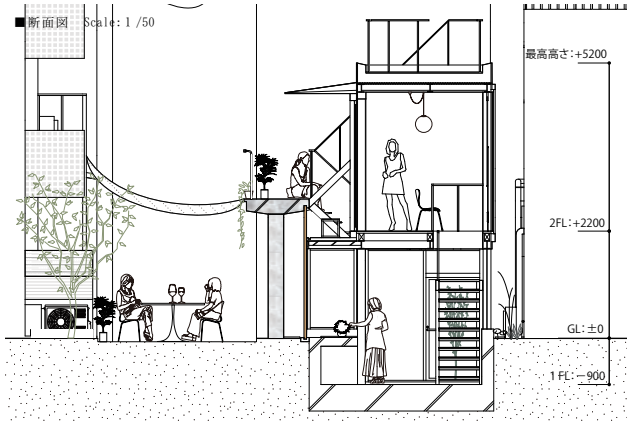
■ DIAGRAM



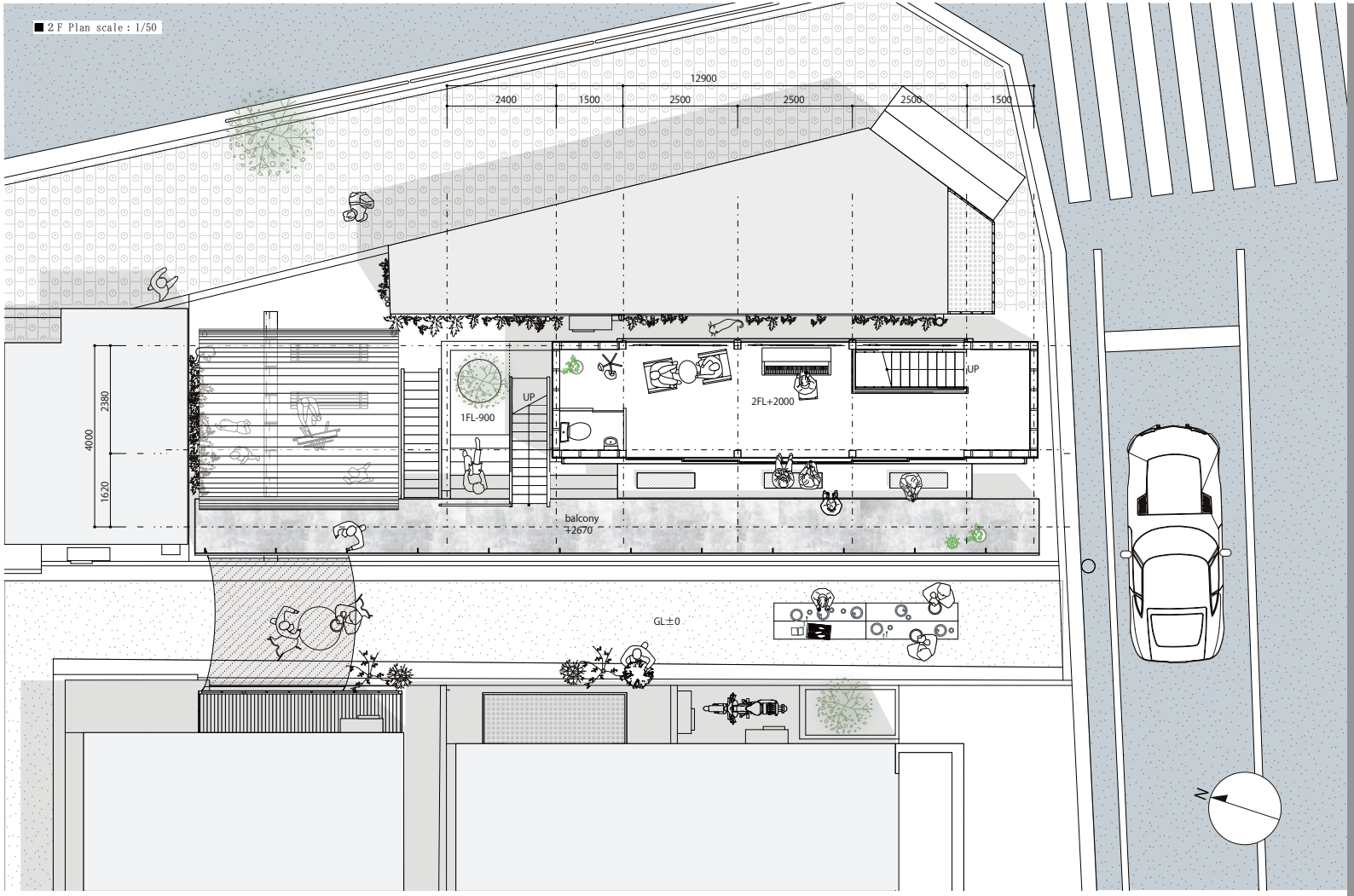
■主要構成要素



■断面図 Scale: 1 /50



■2F Plan scale : 1/50



■Elevation scale : 1/50

Model Photo